

子どもがいる親世代に聞いた「2022 年:テストのオンライン化・CBT ならびに親の IT リテラシーに関する調査」

約 9 割の親世代が学校のテストのオンライン化に期待！

CBT 形式のテストへの関心度が高く、約半数は小学生前からの開始を希望

～教育 ICT 化への不安はないが、親自身も IT リテラシー向上に意欲的に～

e-ラーニングに関するサービスの様々なコンテンツを提供する株式会社イー・ラーニング研究所(代表取締役:吉田智雄、本社:大阪府吹田市 以下、イー・ラーニング研究所)は、子どもがいる親を対象に「2022年:テストのオンライン化・CBTならびに親のITリテラシーに関する調査」を実施いたしましたので発表いたします。

イー・ラーニング研究所は、インターネットを利用した家庭向けe-ラーニングサービス『フォールスクラブ』、小・中学生向け動画教育配信サービス『スクールTV』などのデジタルサービスに加え、世界で活躍できる力を身につける、小・中学生向けキャリア教育用テーブルゲーム教材『子ども未来キャリア』を展開しています。

今回、イー・ラーニング研究所では 20 代～50 代の子どもがいる親を対象に「2022 年:テストのオンライン化・CBT ならびに親の IT リテラシーに関する調査」を実施いたしました。その結果、CBT 自体の認知度はまだ低いものの、テストのオンライン化並びに CBT 化について非常に期待を寄せていることが明らかになりました。また、CBT 形式でのテストを受けさせるのに適正な時期として小学校前～小学校低学年という意見が半数を占めており、子どもが幼いうちからITに触れさせたいという希望が伺えます。一方で、親自身の IT リテラシーについては半数以上が不安を感じていることがわかり、子どもの教育環境の変化を受けて、親自身も IT リテラシーの向上に意欲的であることがわかりました。

【「2022年:テストのオンライン化・CBTならびに親のITリテラシーに関する調査」調査概要】

調査方法 : 紙回答

調査地域 : 全国

調査期間 : 2022年5月4日(水)～5月28日(土)

調査対象 : 20代～50代の子どもがいる親 男女 計428人

※本リリースに関する内容をご掲載の際は、必ず「イー・ラーニング研究所調べ」と明記してください

調査結果概要

- ① **約 9 割が学校のテストのオンライン化に賛成！**
テスト結果のフィードバックや成績の可視化による学びの定着に期待が高まる一方、
子どもの勉強姿勢や環境面に懸念も
⇒学校のテストのオンライン化について約 9 割の親世代が賛成と前向きであることがわかり、「時間の有効活用」「学びの定着強化への期待」が理由であると明らかになった。その一方で、「人目がない環境での子どもの学習姿勢」「通信環境」への懸念を示す反対の声も上がっている。
- ② **CBT への認知度は低いものの、CBT 形式での検定の関心度は 8 割以上！**
CBT 形式のテストは小学生前から始めるのが適正と考える人が約半数という結果に
⇒“CBT”という言葉を理解している人はわずか 1 割と低いものの、CBT 形式でのテストについて 8 割以上が積極的に取り組みを希望していることがわかった。さらに CBT 形式のテストは小学校前～低学年の段階から導入すべきであるという声が半数以上であり、幼少期から IT に触れさせたい希望が伺える。
- ③ **教育 ICT 化に不安を感じるのは約 2 割と低いものの、親世代自身の IT リテラシーへの不安は約 7 割**
子どもの教育環境の IT 化を受け、9 割以上の親世代が自身の IT リテラシー向上に意欲的に！
⇒教育の ICT 化に不安を感じるのが約 2 割と低い反面、親世代自身の IT リテラシーに不安を感じる人は約 7 割と高い結果になった。加えて、9 割以上が、親世代向けの IT リテラシー向上の取り組みを必要だと感じていることが明らかとなった。PC などデバイススキルの向上を筆頭に、子どもの教育をサポートできるように、自身の IT リテラシーを上げていく取り組みが求められていることが見て取れる。

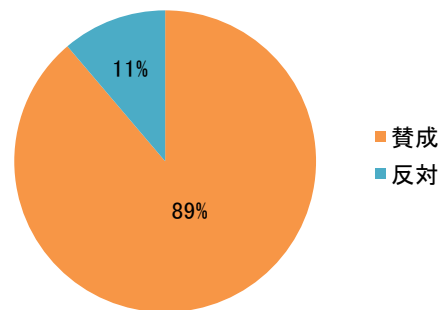
1. 約9割が学校のテストのオンライン化に賛成！

テスト結果のフィードバックや成績の可視化による学びの定着に期待が高まる一方、 子どもの勉強姿勢や環境面に懸念も

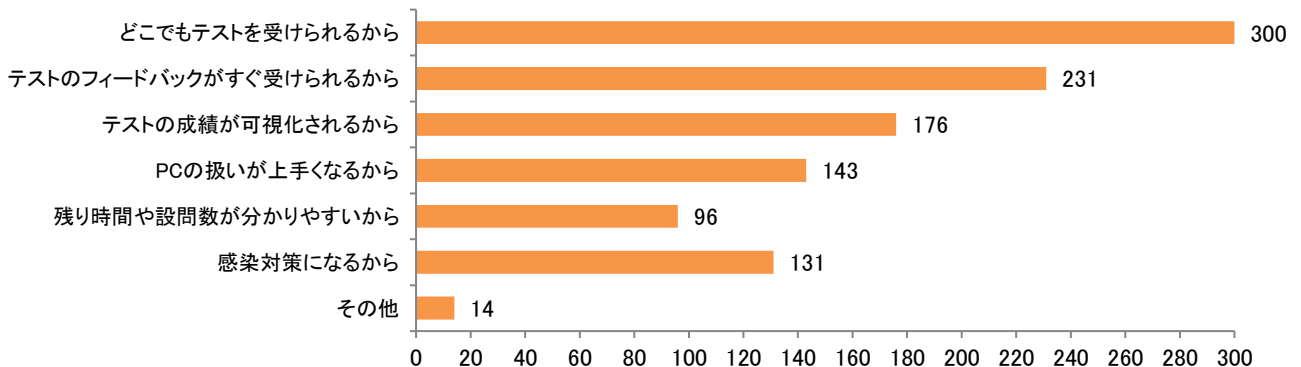
「学校でのテストのオンライン化について賛成ですか＜SA＞」という問について、89%が「賛成」(380)と回答し、約9割が学校のテストのオンライン化に前向きであることが明らかとなりました。また、「賛成」の理由の第1位は、「どこでもテストを受けられるから」(300)となり、コロナ禍で移動にかかる時間の有効活用に重きを置く人が増えたと考えられます。さらに、「テストのフィードバックがすぐ受けられるから」(231)、「テストの成績が可視化されるから」(176)という回答も多く、オンライン化による学習の定着強化に期待が高まっていることがわかります。

一方で、「反対」の理由としては「カンニングなどの不正行為の可能性があるから」(31)、「インターネット環境の差が出るから」(28)が多く、人目がない環境での子どもの学習姿勢や、通信環境に関する懸念があることが明らかとなりました。

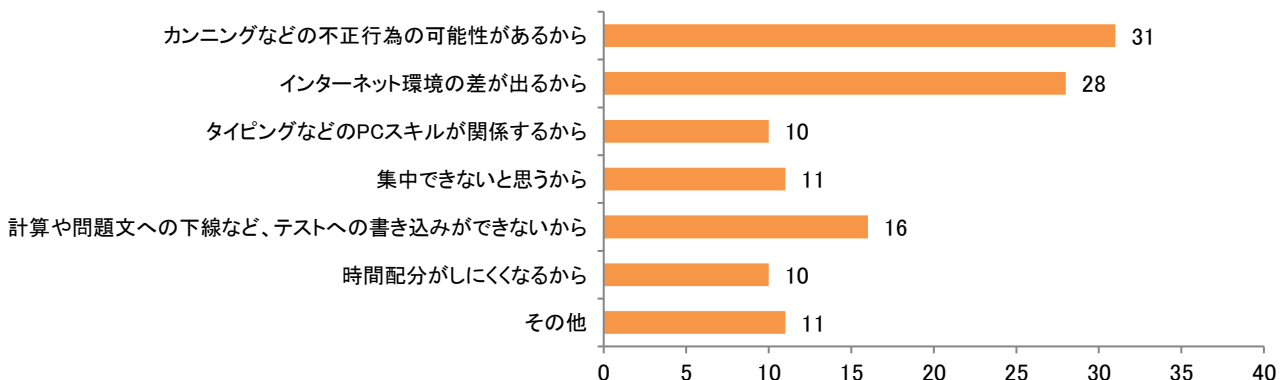
Q. 学校でのテストのオンライン化について賛成ですか＜SA n=428＞



Q. 「賛成」と答えた方に質問です。なぜ賛成ですか。＜MA n=380＞



Q. 「反対」と答えた方に質問です。なぜ反対ですか＜MA n=48＞

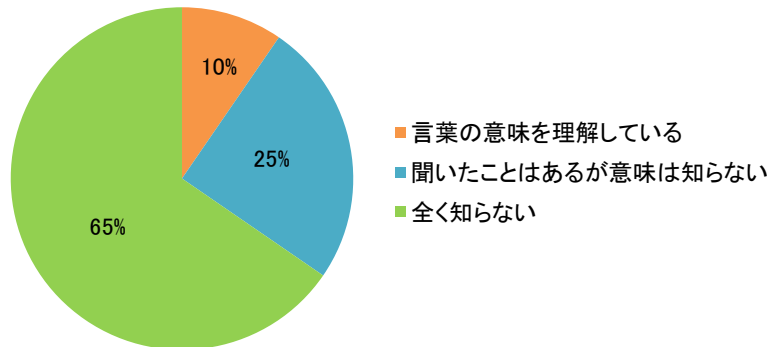


2. CBT への認知度は低いものの、CBT 形式での検定の関心度は 8 割以上！

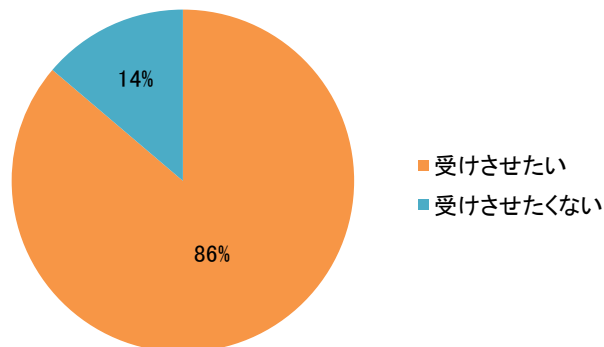
CBT 形式のテストは小学生前から始めるのが適正と考える人が約半数という結果に

「CBT という言葉を知っていますか<SA>」という問では、「言葉の意味を理解している」(41)と回答した人がわずかに 10%と低い結果となり、テストのオンライン化への関心度は高いものの、未だ CBT が浸透していないことが伺えます。その一方で、「子どもに英語や漢字などの検定を CBT 形式で受けさせたいですか<SA>」の間では 86%が「受けさせたい」(369)と回答しました。“CBT”という言葉自体の認知は低い反面、オンラインでの受検には積極的に導入を希望していることがわかります。

Q. CBT という言葉を知っていますか<SA n=428>

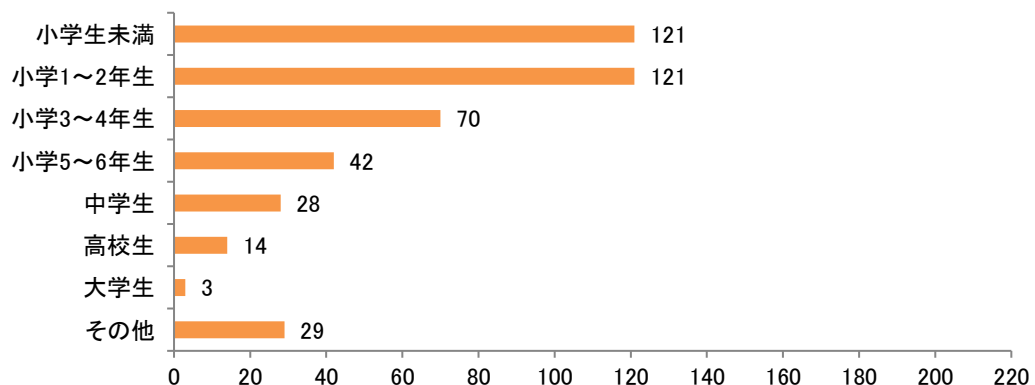


Q. 子どもに英語や漢字などの検定を CBT 形式で受けさせたいですか<SA n=428>



さらに、「CBT 形式のテストを導入するのはいつからが適していると思いますか<SA>」という問では、「小学生未満」(121)、「小学 1～2 年生」(121)という回答が多く、合わせると全体の半数を占めています。GIGA スクール構想や教育の ICT 化を受け、幼少のうちから IT に触れ、慣れ親しんでほしいといった希望が伺えます。

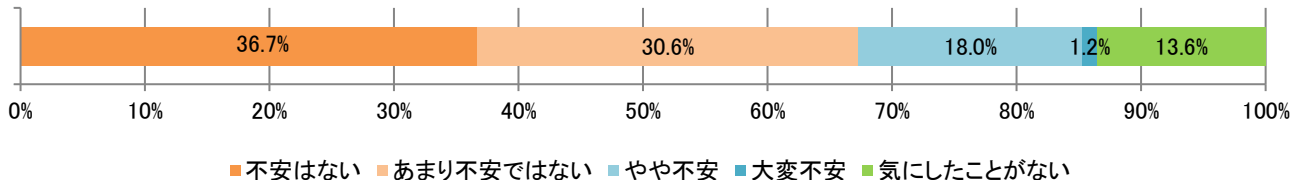
Q. CBT 形式のテストを導入するのはいつからが適していると思いますか<SA n=428>



3. 教育 ICT 化に不安を感じるのは約 2 割と低いものの、親世代自身の IT リテラシーへの不安は約 7 割 子どもの教育環境の IT 化を受け、9 割以上の親世代が自身の IT リテラシー向上に意欲的に！

「教育の ICT 化が進むことへの不安感がありますか<SA>」という問について、「あまり不安ではない」(131)、「不安はない」(157)と回答した人は合わせて約 7 割となり、多くの親世代が教育の ICT 化に期待を寄せていることがわかります。

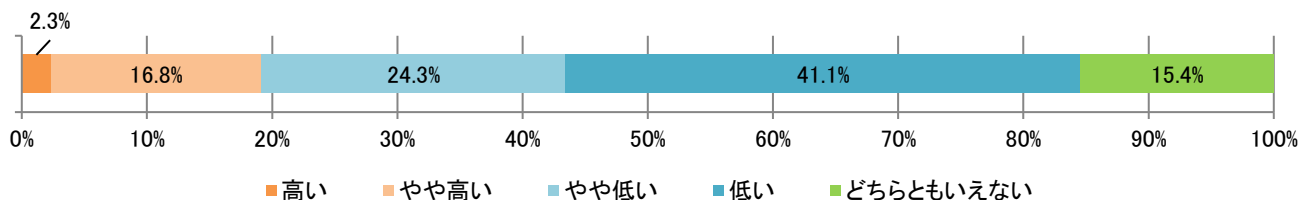
Q. 教育の ICT 化が進むことへの不安感がありますか<SA n=428>



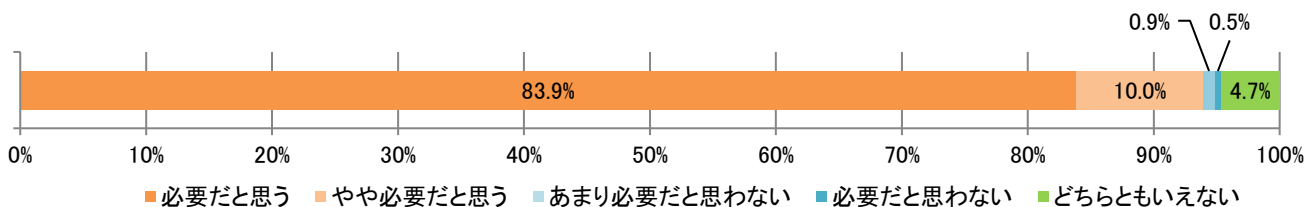
一方で「自分自身の IT リテラシーは高い方だと思いますか<SA>」の間では「低い」(176)、「やや低い」(104)が 65%と半数以上を占めており、加えて、「保護者を対象にした、IT リテラシーを高める取り組みは必要だと思いますか<SA>」では「必要」(359)、「やや必要」(43)と回答したのが 94%と非常に高い結果となりました。

さらに、「どういった IT リテラシーを高める取り組みに参加したいと思いますか<MA>」の間について、約 3 割が「PC などデバイススキルの向上」(311)と回答していますが、どの項目にも一定以上のニーズがあり、IT 全般に関心が高いことがわかります。子どもの教育をサポートするためにも、IT 機材やシステムについて、親世代の IT リテラシーの向上が求められていることが伺えます。

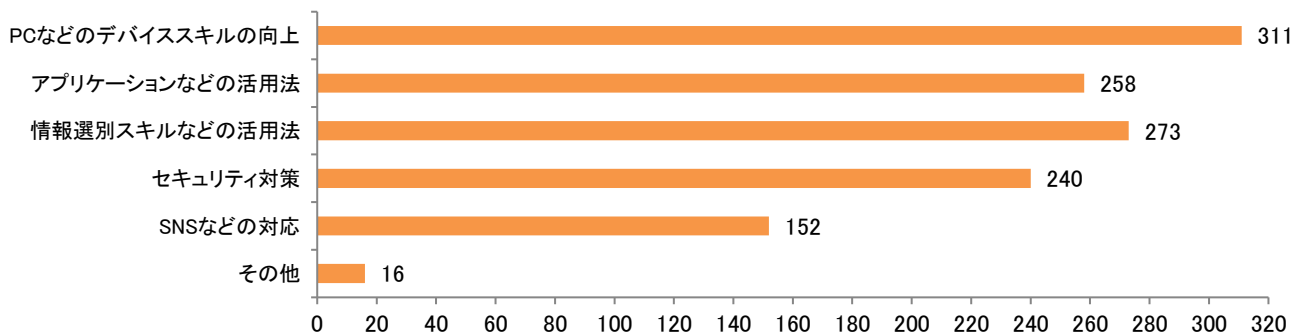
Q. 自分自身の IT リテラシーは高い方だと思いますか<SA n=428>



Q. 保護者を対象にした、IT リテラシーを高める取り組みは必要だと思いますか<SA n=428>



Q. どういった IT リテラシーを高める取り組みに参加したいと思いますか＜MA n=428＞



【「スクール TV」概要】

「スクール TV」は、「学習習慣の定着」を目的とし、全国の教科書内容に対応した小・中学生向けの動画教育サービスです。約 1,000 本のオリジナル授業動画を配信し、自ら能動的に学習する「アクティブ・ラーニング」のメソッドを日本で初めて動画内に導入しています。

また、学習習慣が身についた子どもが、もう 1 つ上の目標を目指すために開始された学習コンテンツとして、現在、教科書や教材出版社など他社のドリルも提供しています。

全国教科書対応・アクティブラーニング
スクール TV

■ URL : <https://school-tv.jp/>

■ 利用料金 : 無料
有償プラン(「成績向上目的の学習コンテンツ」を有償で提供)
・スクール TV プラス: 月額 300 円(税込)
・スクール TV ドリル: 200 円(税込)～ ※学習教材により異なる

■ 対象 : 小学生(1 年生～6 年生)、中学生(1 年生～3 年生)

■ 学習内容 : 小学校 1～2 年生: 算数
小学校 3～6 年生: 算数・社会・理科
中学校 1～3 年生: 数学・社会・理科・英語・国語

■ サービス特徴 :

1.「授業動画が見放題」

- ・小・中学校の教科書に対応した授業動画が見放題
- ・単元の中で「重要ポイント」に絞り込み、テレビを見るような感覚で楽しく学習できる
- ・映像総数: 約 1,000 本

2.「やる気を育てる講師陣」

- ・有名大学の現役学生を講師として採用
- ・お兄さん・お姉さんのような親しみやすさを演出

3.「アクティブ・ラーニングメソッド採用」

- ・文科省が推進する主体的・対話的で深い学び「アクティブ・ラーニング」の視点を導入
- ・授業開始前の約 5 分間に「アクティブ・ラーニング動画」を採用し、子どもの興味を惹きつける
- ・定期的に質問を投げかけるなど適度に自分で考える機会を与えることで、「能動的」な学習が可能

【「子ども未来キャリア」概要】

「子ども未来キャリア」は、子どものときから夢や目標を持ち、グローバル社会で必要となる知識と能力を育む、キャリア教育用テーブルゲーム教材です。授業は、「QMI メソッド」と呼ばれるアクティブ・ラーニング型の独自メソッドを用いて実施します。テーブルゲームを通しての疑似体験だけでなく、子どもたちに具体的想起をうながすスライド教材を使用することで、「頭」と「体」で理解を深めます。学習内容について子どもたちが自分事として考えられるので、意欲的かつ効率的に楽しみながら学ぶことができます。

■URL : <https://force-academy.jp/kodomo-mirai-career/>

■教材対象年齢 : 小学生・中学生 ※その他要相談

■販売対象 : 全国の学童施設や学習塾、学校など、教育関係の企業・組織
子ども向けの体験型イベントを開催される企業等とのコラボレーション

■学習テーマ : 全部で 12 種類あり、国際的に定義された「21 世紀型スキル」と「日本では学ぶ機会の少ない教育」で構成しています。

- A お金の価値の決まり方 “需要と供給”
- B 目標を持ち、夢を叶えるための “逆算思考”
- C 家族・友達と仲良くいられる “コミュニケーション”
- D 友達と協力してみんなで活躍するための “チームワーク”
- E 人の話を聞き、自分の考えを伝える “ディスカッション”
- F お金や時間を上手に使う “ものづくりと投資”
- G 自分と違うところをお互いに認め合う “違いと個性”
- H 国際社会でのコミュニティにおける “ルール”の役割”
- I 複数の情報を正しく扱えるようになる “情報リテラシー”
- J いろいろなイベントを通してこれからの人生を考える “ライフプラン”
- K 国際社会における日本と世界の関係 “貿易と外交”
- L 持続可能な開発(SDGs)に向けた “Win-Win の関係”



【株式会社イー・ラーニング研究所】

名称 : 株式会社イー・ラーニング研究所
本社 : 大阪府吹田市江坂町 1 丁目 23-38 F&M ビル 6F
東京支社 : 東京都港区港南 1 丁目 8-40 A-PLACE 品川 1F
代表者 : 代表取締役 吉田 智雄
URL : <https://e-ll.co.jp/>